

保育・教育の価値とリスク 感染症流行と、変わる社会のもとで

新型コロナウイルス感染症（以下、「新型コロナナ」）はワクチン接種も本格化、順調に進めば、状況は徐々に良くなっていくでしょう。でも、新型コロナウイルスで「少子化が18年、早送りされた」（日経ビジネス電子版 2021年5月12日）という経緯です。厚生労働省の検討会（5月26日^{*1}）でも、保育所利用児数は2025年がピークという資料が示されました。未就学児施設には「保護者と職員に選ばれる園」となる戦略、自治体には人口流入と定着を促す施策が必要。今回は第1回に続き、保育の質と安全の接点です。

空気環境は、成長発達と健康にとって重要

まず、自治体の職員配置が国基準以上であれば、移転を考えている保護者（予備軍）にとつ

育つ場、働く場の環境 —空気環境、休憩室やホールの設置

7

掛札逸美

KAKEFUDA Itsumi

心理学博士

保育の安全研究・教育センター

心理学博士（健康／社会心理学。専門は安全とコミュニケーションの心理学）。1964年生まれ。筑波大学卒。健康診断団体広報室に10年以上勤務後、2003年、コロラド州立大学大学院に留学、2008年、博士号取得。産業技術総合研究所特別研究員を経て、2013年、NPO法人保育の安全研究・教育センター設立（2020年に任意団体化）。厚生労働省「平成27年度 教育・保育施設等の事故防止のためのガイドライン等に関する調査研究事業検討委員会」委員の他、死亡事故の検証委員等も務める。

てプラス要因になります。「人手不足だから無理……」？ いいえ、国基準以上の職員配置は働く側にとってもプラス。職員のネットワークを通じて「うちの自治体の園で働かない？」と伝えていく動機づけにもなります。「1歳児の配置3対1」（第1回）を、新潟県が職員募集の切り札のひとつとして使っているように。

もちろん、職員配置は私立園であっても園独自に増やすことが難しいでしょう。けれども、園単位ででき、職員を集めるプラス要因になることは他にもあります。

まず、新型コロナウイルスで問題になった「換気」。既存の建物の一角やフロアを使って運営している園が都市部を中心にたくさんありますが、窓ガラスがはめごろしというケースも多く、玄関以外、外気をとりこめる口がない園もあります。

排煙窓は設置されているものの、換気のために毎日開け閉めする作りではありませんから、閉めていたらワイヤーが切れた、閉められない、いざという時に開けられないということも実際に起きています。

換気が悪い環境（目安は二酸化炭素濃度計で1000ppm以上）は、子どもの脳の発達にも悪影響ですし、おとなの体調、集中力にもマイナスです。換気が悪ければ、壁の内側や家具の裏側にカビ等が繁殖する原因となり、新型コロナウイルスだけでなく、喘息や細菌性肺炎、インフルエンザ等の発生につながります。開けられる窓がなければ、サーキュレーターや扇風機など、よぶんな出費にもつながるでしょう。

自治体レベルや法人レベルで「空気環境が悪いと想定される建物内に園を設置しない」「子どもと職員の健康のため、換気が十分にできる園を作る」と宣言し、取り組んでいくことは、（広報すれば）保護者や職員にとって大きなアピールになるはずです。

休憩室等の質が働きやすさ、安全につながる

この時、見逃してならないのは、更衣室や休憩室、事務室です。新型コロナウイルスをめぐる報道を見ていても、病院や店舗の休憩室、更衣室で感染が広がった？と考えられる事例が多々あります。園でも、休憩室や更衣室は隅に追いやられ

がちで、窓のない狭い部屋が少なくありません。休憩室や更衣室がもともと倉庫と兼用だったり、気づいたら倉庫のようになっていたり、狭すぎたり…。

休憩室等の環境は、これまでも働く人をみじめな気持ちにさせる一因だったわけですが、空気感染すらする感染症が登場したことで、健康という（本来なら当然の）側面も具体的に取り組むべきものになったわけです。

国も床面積基準に休憩室、更衣室、作業室を入れるべきです。でも、そんな「横並び」を期待しているヒマはありません。「これがわが園の売り！」とばかりに先取りすべき。換気や採光、面積だけではありません。先輩がいたり、作業をしている職員がいたりしたら「休憩」などできないのですから、職員が自由に使える部屋（場所）をあちこちに作りましょう。デスクや車中で居眠りするようなことをさえ、未就学児施設の職員にはできないのですから、真の意味で「休憩」できる場所が不可欠。疲労や眠気は、まず安全において最大の敵です。

子どもの命と職員の心を守るための園環境

そして、ホールや廊下を必ず作ること。先生たちが子どもを寝かしつけようと必死になる理由のひとつは、「この子が寝ないと（泣くと）、他の子が起きてしまう」。実際、ホール

はおろか廊下すらなく、休憩室も事務室もなく、床面積基準ぎりぎりのフロアを柵で区切って、ゼロ〜5歳児数十人を預かっている認可園はいくらでもあります。ゼロ歳児の泣き声も5歳児の遊ぶ声もすべて響いている…、集中して生活できるおとなが育つでしょうか？

先生たちは、最低限の環境の中で保育以外の仕事をする時間をひねり出すため、必死に寝かしつけようとする。こうした環境で起こる死亡事故を「保育士の無知のせい」と言って済ませるべきではないと、私は思います。

そして、子どもが昼間に熟睡する必要はなく、夜、熟睡することこそが成長ホルモン上も不可欠である以上、眠らない（眠れない）子は寝かさなくてよい。でもそれは、ホールや廊下で遊べる環境がなければできません。

園庭については言わずもがな。夏、床面温度が50℃を超えるような屋上園庭はごく普通。園建設予定の時点から始まっている隣接住民とのいさかいを（自治体が）無視して施設を設置、結局、園庭は使えず、窓も開けられない園が各地に。いずれも成長・発達に悪影響であり、職員の仕事満足度を下げる原因になります。

「うちの園には関係ない」？ 20年後の世界を支える人たちの育ちは、私たちおとな全員の問題です。

*1 「地域における保育所・保育士等の在り方に関する検討会」（第1回、オンライン開催）資料3